



Title	コロナ禍において「境界」に生きる在日中国人：生活実践とライフストーリーからの考察
Author(s)	王，石諾；胡，毓瑜；三好，恵真子
Citation	大阪大学大学院人間科学研究科紀要. 2021, 47, p. 113-142
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/79072
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

コロナ禍において「境界」に生きる在日中国人 —生活実践とライフストーリーからの考察—

王 石諾・胡 毓瑜・三好 恵真子

目 次

1. はじめに
2. 日中の実情及び在日中国人の生活
3. 中国人留学生の「声」：フォーカスグループインタビューから
4. 社会人である在日中国人のライフストーリー
5. コロナ禍に生きる在日中国人とその境界性
6. おわりに

コロナ禍において「境界」に生きる在日中国人 —生活実践とライフストーリーからの考察—

王 石諾・胡 毓瑜・三好 恵真子

1. はじめに

2020年1月に中国武漢市が最初の流行地として、新型コロナウイルス（COVID-19；以下「コロナ」と略す）による感染症が世界規模で拡大したことを受けて、各国政府間の防疫対応により、人々の行動に大きな制約が課される中、突然現れた不可視で終わりの見えないリスクを前に、経済や教育はもとより、人々の生活全般にわたって大きな影響が生じている状況は、言うまでもない。

こうした前代未聞の事態により、コロナ問題に関する研究は、医療や公衆衛生といった治療・予防に直結する専門領域以外にも、多方面において、急速に活発化している。マクロな側面では、国際関係や国家システムに焦点を当てつつコロナ問題を政治学・経済学の専門性から論じる研究が多い。例えば、コロナの感染状況による日中及びヨーロッパの国家システムを比較し、個人と国家の関係をコロナ問題において改めて問い直す議論（梶谷, 2020）、日本政府の防疫対応に関する考察から日中関係の影響までの指摘（高, 2020）、コロナ禍の民間交流からみる日中関係のあり方に関する考察（韓, 2020）等が挙げられる。

一方、世界がコロナ問題によるパンデミック状態に陥る現在、国際関係のみならず、個人の日常生活を捉える研究にも注目が集まっている。こうした側面からは、コロナ禍での教育方式の実践が活発化しているとする論考（成瀬, 高田ら, 2020）が見られる。さらにコロナ禍における人々のネガティブ感情に関して、橋元 (2020) は、不安、ストレス、抑うつ、孤独感に焦点を当て、緊急事態宣言発令前後の変化を比較検討しており、また鳥海ら (2020) は、情報拡散のメカニズムを明らかにするために、ソーシャルメディアを用いて、コロナに関する投稿を収集し、ユーザの感情変化を分析している。ただし、上述のように個人の相互作用や小集団研究などのミクロな側面からの研究は、徐々に蓄積されつつあるものの、いずれも行動主義の心理学や認知論、測定論などの計量分析を中心とした行動科学に傾倒している。さらに、コロナの事情は動態的に変化し続けるゆえに、その速報性を重視して段階的・部分的な結果を公表する研究が特徴的となり、それらは今後変化する可能性も否めず、さらに刻々と変化する状況や予測、また微細な状況を把握することは困難を極めている。ここで特に重要な点として、「自粛警察」という言葉が

生み出されるように、監視社会、プライバシー、人権などの面からもコロナの問題は非常にセンシティブな内実を含んでおり、現象の背後に潜む真実や心の内面等を明らかにすることは、なお一層容易なことではない。

そこで、本研究では、このコロナ禍の課題に対して、個人のアイデンティティや日常意識などに関わる人々の心の内面的な側面、また社会変動の担い手としての個人の役割などの側面を重視し、調査者と被調査者の間で構築されていく対話的インタビューとしての個々のライフストーリー分析を通じて、社会を位置づけ直すことを試みていく。具体的には、日本と中国という二つの国家の狭間に生きる「境界人」として、リスクとそれによる不安を抱えながら生きる在日中国人を対象とし、その生活実践や心のありように焦点を当てることとし、中国語話者に対し、筆者自身も在日中国人であるという当事者性も活かしていきたい。在日中国人の立場に鑑みると、コロナの感染拡大の過程で、各国政府間対応に時間差が生じており、中国では4月8日の武漢封鎖解除が一次収束とされたのに対し、日本では4月16日の「緊急事態宣言」からようやく政府の本格的な対応が始まった。つまり在日中国人は日本に暮らしているにも関わらず、感染拡大につれて外国人への排斥態度が強まる(Yamagata, 2020)という傾向があり、日本社会からコロナの最初流行地の中国人としての視線を浴びることが少なくない。一方で、母国の中国社会からは、後発的感染地の日本に住んでいるがゆえに一定の距離が置かれる。それゆえに在日中国人は、特に今回「コロナ」という言葉と強く結びつけられる状況の中で、その境界性は強まり、また変化しうることが考えられるが、先行するコロナに関する議論の中には、在日中国人の日常生活者としての生活実践やそのまなざしについて、検討されたものはほとんど見あたらない。しかしながら、赤坂(2019)は、ウチとソトを行き来し、人々の新たな結びつきを生み出す「境界人」の役割、すなわちマージナルな視座から見えてくる世界観に注目している点を参照とし、本研究においても、周縁からコロナ禍の社会の全体を見つめ、内と外の二元論を超える境界や交わりの中にこそ重要な物語が存在していることを描写していくこととする。

したがって、本稿では、まず研究の背景として日中社会の実情やその変容を踏まえながら、中国人留学生の声を集めたフォーカスグループインタビュー並びに社会人の在日中国人3人のストーリーを分析することにより、コロナ禍において、在日中国人がどのような困難を抱え、どのようにコロナのリスクを生き抜くのか、さらには社会をどのように位置づけなおしていくかについて、明らかにしていく。

2. 日中の実情及び在日中国人の生活

2-1. コロナ感染拡大の日中経緯及び日中政府の対応

新型コロナウイルスの感染は、2019年12月初旬、最初に中国湖北省武漢市から発見され、その後中国全土に広がり、さらに世界中へ急拡大していた。ここではまず、コロ

ナ禍において日中双方の実情というマクロの社会的背景を念頭に置きつつ、引き続き個々人の生活を論じる上での基盤状況を押さえておく。日中両国の感染拡大の経緯に関して、時間軸に沿って、日本と中国を比較しながら表1にまとめた。同時に、図1と図2には、日本と中国における感染者の1日ごとの推移を経時的に示した。

コロナ感染拡大・時系列の主な出来事		
中国	日付	日本
武漢市で原因不明の肺炎患者が最初に報告	2019.12.8	
局地的流行の中心地とされる華南海鮮卸売市場を閉鎖	2020.1.1	
	1.6	中国武漢で原因不明の肺炎 厚労省が注意喚起
春節にかけて大型連休が始まり、延べ30億人の大移動が始まった	1.10	
	1.14	WHO 新型コロナウイルスを確認
	1.16	日本国内で初めて感染確認 武漢に渡航した中国籍の男性
武漢の集合住宅地で4万以上の世帯が集まり、伝説行事が実施され、この催事で感染拡大に拍車がかかったとみられる	1.18	
武漢市が感染拡大を防ぐための都市封鎖を宣言し、政府は海外旅行禁止を決めた(27日から)	1.23	
国務院は春節を3日延長、各種学校の開校も延長。広東省政府は公共の場でのマスク着用を義務付き、違反者に対する罰則を導入	1.26	
	1.30	WHO「国際的な緊急事態」を宣言
受け入れる施設の容量が不足していたため、武漢市は臨時医療施設(方舱医院)の設置を決定	2.3	乗客の感染が確認されたクルーズ船は横浜港に入港。2.5から14日間の船上隔離開始
	2.11	WHOが新型コロナウイルスの感染による疾患を「COVID-19」と命名
	2.13	日本国内初めて感染者死亡
	2.27	安倍首相は全国の小中高校に臨時休校要請の考え公表、大規模イベント自粛を要請
	3.9	専門家会議が「3条件重なり過ぎて」と呼びかけ
武漢市の臨時医療施設(方舱医院)全てが休止	3.10	
衛生当局は「中国は感染のピークを超えた」と宣言	3.12	
	3.16	中国本土以外での感染者数が中国本土での感染者数を超える
	3.24	東京五輪・パラリンピックは1年程度延期に
武漢市に在留していた北京市の住民が北京に戻り、線路バスが一部再開、正常な日常生活を徐々に取り戻しつつある	3.25	
	4.7	7都府県に緊急事態宣言
武漢市に対する封鎖が解除	4.8	
	4.11	日本国内の感染者1日人数としてはこれまでで最多の700人超
	4.16	「緊急事態宣言」全国に拡大
	4.18	日本国内の感染者1万人超える
	5.4	政府「緊急事態宣言」5月31日まで延長
	5.14	政府緊急事態宣言39県で解除、8都府県は継続
	5.21	緊急事態宣言、関西は解除、首都圏と北海道は継続
	5.25	緊急事態は全国で解除宣言
北京市の食品卸売市場で50人以上のクラスターが発生	6.13	
	6.19	都道府県またぐ移動の自粛要請、全国で緩和
	6.28	世界の感染者は1000万人超える
	7.2	東京都107人の感染確認、100人超は約3か月ぶり
遼寧省大連市の水産加工会社で集団感染が発生	7.22	
	7.23	東京都366人感染確認、過去最多
	8.11	世界の感染者2000万人を超える
	8.20	対策分科会「流行はピークに達したとみられる」

表1. コロナの日中タイムライン（人民網とNHK公開情報により筆者作成）

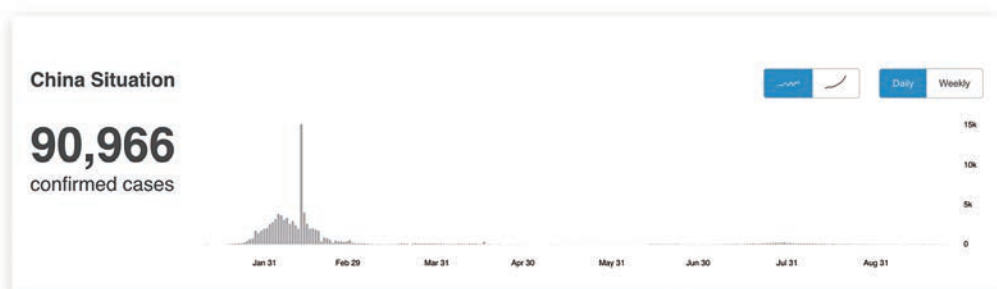


図 1. 中国大陸のコロナ感染者数（出所：WHO）

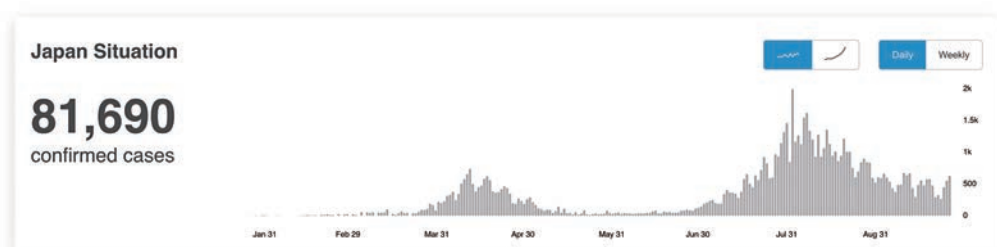


図 2. 日本のコロナ感染者数（クルーズ船を除く）（出所：WHO）

表 1 から分かるように、中国では、2019 年末の時点で武漢市で初めての肺炎患者の発見報告がコロナ感染の契機となり、その後、武漢市に対する封鎖がなされ、2020 年 4 月 8 日におけるその解除を第一段階の収束と見なすことができる（表 1 のオレンジ色の部分はその時間帯を指す）。それに対して、日本の場合は、2020 年 2 月 27 日に安倍首相が大規模イベント自粛の要請を提出したが、これは行政上の注意喚起であり、その後、緊急事態宣言を発令し、全国で解除したのは 5 月 25 日である。ただし、7 月になると日本全国の感染人数は再び上昇し、いわゆる感染拡大の第二波に見舞われた。本稿の執筆の時点では未だ完全に収束したと言い難い状況にあるが、日本側のコロナとの戦いの時間帯をひとまず記しておく（表 1 の青色として示した部分）。加えに、感染者数の図 1 と図 2 を併せて比較すると、中国の感染ピークは日本よりずっと先行しており、さらにそのピーク感染人数は、日本の 8 月のピークより 3 倍以上も多かった。

以上、日中両国の実情を比較すると、中国のコロナ感染流行が先行したため、日中における感染のピークは明確にずれており、これに連動して日中政府の反応や対応にはかなりの時間差が生じている。さらに、コロナの防疫対応において、国家システムによる対応実施の強制力も著しい差異が見えてきた。

2-2. コロナ禍における在日中国人の生活と本研究の視角

コロナの流行がどの国で先行するか、また政府がどのように対応するかについては、

コロナ禍に生きる日常生活者にとって、自分の意志で決定できるものではなく、むしろ障壁のような事実として受け入れざるをえないが、その一方で、我々の生活はこうしたものに常に翻弄されてしまう。特に、コロナが世界に広まっていく過程において、中国及び中国出身者に対し、そう見えるアジア人も含めて差別が相次いでおり、コロナで中国嫌悪がさまざまな形で顕著化される中、コロナ禍の在日中国人の生活にも影響があることは想像に難くない。

コロナが世界に蔓延して以来、コロナ関連する用語による中国への差別的攻撃も見られた。アメリカ大統領が公の場において、新型コロナウイルス感染症を「Chinese virus」と称する暴力的な言葉が世界中に発信された¹⁾。また、コロナを「『武漢ウイルス』と呼ぶべきだ」との発言が日本の政治家の間にも見られた²⁾。加えて、ネット空間には新型コロナウイルスを「武漢肺炎」とする書き込みも多々見受けられた³⁾。世界保健機関(WHO)は2020年2月11日に「COVID-19」という正式な命名を発表したとはいえ⁴⁾、こうした差別や風評被害を助長させる発言がしばしば散見される。

さらに、日常生活の中で暴力的な言葉をぶつけられた人もおり、ここで一部取り上げてみる。2月に、香川県内の小学校に「中国人を親に持つ子どもを登校させるな」という内容のはがきが届いた⁵⁾。3月には、横浜中華街の4つの店舗に「中国人は細菌だ！日本から出て行け！」という差別的な内容が書かれていた差出人は不明の手紙が送られてきた⁶⁾。7月上旬、親戚とゴルフ場に出かけた東京在住の在日中国人の男性は、いつものクセで「ナイスプレー」と中国語で叫んでしまった結果、怒った様子の他の日本人客に「黙れ、中国に帰れ」と暴言を吐かれたという⁷⁾。

こうしたことを一例として、日本社会に生活する中国人は、日本でコロナ発祥の地の中国人としての視線を浴びることが少なくないことが伺える。一方、母国の中国では初期コロナの残酷な印象を受けていることから、日本で後発的に感染拡大する中で、在日中国人は日本人より早めに不安を強く感じていたと考えられる。その例の一つとして、3月30日に、渋谷で在日中国人のボランティアによるマスク配布運動が行われたが、この目的は、日本においてマスクが品薄になった事態を支援することだけでなく、日本人のコロナに対する無防備さから警戒意識を高めることであつた⁸⁾。この渋谷の活動を一例として、日本各地で様々な在日中国人によるマスク配布運動が行われた⁹⁾。

したがって、コロナ禍において、在日中国人は、日本人と同様に移動の制限の影響を受けているだけでなく、日中政府対応の時間差やそれを受け止める社会の状況を意識しながら、日本社会のコロナ対応の遅れに対して焦りや不安を感じつつ、社会に顕在化しつつある差別の下、複雑な思いで暮らしている状況が推察される。

上述を踏まえ、世界を巻き込むコロナに関して、国際関係や国家システムとのマクロな視点からコロナ問題を扱い、トレンドを把握することが極めて重要であることは本研究においても見解が一致している。ただし、こうした世界の巨大な変動や国際関係に揺り動かされ、日本と中国との狭間に生きる在日中国人の生活やそのまなざしは、概して

見逃されがちであり、コロナにおける社会的記憶としては捉えられにくい個々人の記憶の語りや彼らの意味付与に貴重な価値があるのではないかと考えた。言い換えるならば、個人の「生き方」そのものは、社会的属性であると同時に個人的属性でもあるため、エスニシティなどが剥き出しに現れ始めているものの、差別等の複雑な経験は、通常、記録されることも文字化されることも稀である。よって、インタビューにより語られ-聞き取られることが、彼ら彼女らのアイデンティティの確保や自らの生活実践の記録としても重要になると考えたのである。

以下、中国人留学生を対象としたフォーカスグループインタビューの結果、そして社会人の在日中国人3人のライフヒストリーの分析結果を順次述べていくこととする。

3. 中国人留学生の「声」：フォーカスグループインタビューから

3-1. 調査方法

本章における調査では、まず、在日中国人留学生を対象とし、日本の大学生として生活する彼ら彼女らが、武漢でのコロナ発生以来の数ヶ月間に日本社会で受けた影響やその変化を包括的に把握することを目的とした。ここでフォーカスグループインタビューの形式をとったのは、議論の最中にお互いに刺激を与えることができるとともに、共感により会話がスムーズになり、彼らの日常の暮らしでは見えにくいコロナの経験と記憶をできる限り鮮明に呼び起こしてもらうことにした。

具体的には、2020年8月31日午後13:30から、ZOOMでオンラインフォーカスインタビュー¹⁰⁾をおよそ1時間半実施した。ここでは、「コロナ禍の中、在日中国人として日常で感じ取ったこと」という主題で、参加者は筆者を含めて8人の在日中国人留学生である。参加者全員が同じ研究室のメンバーであり、全員コロナ感染が拡大する以前から日本に滞在し、この間帰国歴はない。また、会話を円滑に進めるために、インタビューは母語の中国語にて実施した。

3-2. コロナによる直接的な影響

コロナの急速な感染拡大を受けて、2020年2月から日中間の国際移動は厳しく制限された。中国からの出国は禁止され、世界各国から中国への入国にはPCR検査及び2週間の強制隔離が必要になり、その措置は、本稿執筆時の現時点まで継続している。また、2020年4月から本大学内の各活動の行動規制が高まり、講義や授業をすべてオンラインで実施し、大学院生は原則登校禁止の措置を受けたが、研究上の必要で止むを得ない場合登校許可となった。今回グループインタビュー参加者の中国人留学生の語りから、コロナがもたらした影響の中、行動制限による学業上の変化が著しくみえてきたため、語りを抽出しつつ説明してみる。

まずオンライン授業に関して、下記のように、対面できない理由により授業中の議論

が盛り上がらないディメリットが挙げられた。

「(オンラインになったら) 授業中ワークショップの雰囲気が冷たくなって、十分に議論ができていない気がする。」

「…従来ワークショップが多い授業では、ディスカッションの機会が減ってしまい、せっかくの議論もなかなか展開できないことが印象深い。個人的には対面对話が好きなので、オンラインゼミには慣れない気がする。」

また、今回の調査対象である、中国を研究対象とし、フィールドワークを行う社会科学系の留学生たちにとって、人との対面や国際移動などが制限されることで、自らの強みでもある現地での参与観察やインタビューとの調査方法が実施できず、非常に困っていることが分かってきた。

「社会科学研究で重要な現場調査が実施できなくなっちゃって、対面インタビューの代わりに、オンラインインタビューしかできない。でも初対面の調査対象者にオンラインで聞くと、お互いに関係が深められないのから、どうやって話しを進めるかと悩んで、対話がすんなり進まない気がする。」

「研究上は、中国の現地での参与観察ができなくなり、調査対象の表情やしぐさなど細かいことが現場ではつかみ取れるが、今はできない。」

さらに、学業の計画が順調に展開できないことに加え、コロナ禍の警戒の時期には、全員が万が一病気になった場合、普段よりも倍ぐらいの緊張感が増えただろうと語っていた。その中で A 氏は 3 月上旬に 1 週間熱が続いた。ちょうどその頃、コロナ流行拡大が日本に始まった時期と重なり、研究室のメンバーは心配し、A 氏と同じ建物に住んでいる同研究室の T 氏が面倒を見ていたという。

その発熱の経験について、A 氏は次のように語った。

「(自己隔離前) 雨のせいで風邪かなと思った。熱が出る前、結構怖くて消毒していたが、実際に熱が出てから逆に平気になった。その時、みんなが私のことを怖がったので、私は家に閉じこもっていた。T さんは毎日ご飯を作ってドアの手前に置いてくれて、ベルを鳴らしてすぐ逃げていった。ぬいぐるみもくれた、私を慰めるために(笑) …当時、ネットで色々調べて、症状は熱しかないの、多分コロナじゃないと感じた。でも周りの人が結構私のことに心配してくれて…当時、病院にも行ってなかった。両親にも言っていなかった。国内の友達の中に、武漢に支援した経験のある医者の方がいるので、彼

に聞いたら、しばらく病院に行かないで自宅で観察した方がいいと勧められた。その後、一週間ぐらいかかって熱が治った。」

また、A 氏をサポートしていた T 氏は以下のように語った。

「A さんが、熱が出た時、本当にタイミングが悪すぎて、感染したのかどうか、正直私にもわからなくて不安だった。あの子ひとりで日本にいるからもっと手伝ってと中国の両親に言われて、私たちも普段仲良しだから、こんな時期にびびって逃げたらちょっとダメじゃないか…どうせわたしもご飯作るから、多めに作って彼女の分も一緒に作った。彼女が精神的なサポートが必要かなと思って、好きなぬいぐるみを送った。親戚が心配して、飯送りはドアまでとか、A さんに一定の距離を保つとか、何回も念を押した。」

この発熱のエピソードから、A 氏が身の回りの人々の不安や安全を配慮した上で自己隔離を選択し、それに対して、友人の T 氏が不安も感じつつご飯を作ったり、ぬいぐるみを送ったりすることでサポートし続けた。このエピソードから、実際に感染の危機が日本にもきた際、コロナ禍の留学生同士の支え合いが伺え、個人対処には、中国の家族に自分の状況を隠し、また日本の情報にも頼らずに、身近な同じ留学生の友人のサポートを受けて、状況に応じて自己判断するという A 氏の選択が見えてきた。

3-3. コロナ禍において境界人に対する目に見えない排除

上述したように、参加者全員がコロナ前後に日本に滞在していることから、日本に暮らしている日常の中では、自粛で自宅に閉じこもり、オンライン授業が主な時間を占めているにも関わらず、限られている公共の場で人との接触の中で、不愉快な目線や言葉に刺さられた経験が多々あることが、留学生の語りから見えてきた。

「まだ厚い服を着ていた頃、コロナの爆発の最初の頃かな。モノレールで中国人同士で中国語で話し合ったとき、ある男がこっちをちらっと見て、不機嫌そうな顔をしていた。もともとこっちの列で並んでいたけど、ほかの列に移った。失礼だと感じた。」

「そういえば、まだ東京にいたとき、電車で私のスマホの画面が中国語であることに気づき、すぐ遠く離れた人もいた。」

コロナの最初流行地が中国武漢市であり、日本での流行まで 2～3 カ月の時間差があるため、中国人留学生たちは、自分が中国出身だと認識され、様々な形で不快な視線を感じたことがあった。こうした不愉快な経験は、その時間差の時期によくあった。また、日中対応の時間差が見られる時点において、日本での緊急事態宣言発令前でアルバイト

を通常通り行っていた留学生たちには、バイト先でさらに不愉快な経験もしていた。

「最初中国が厳しかった時、バイト先のお客さんに、『実家は武漢に近いの？最近帰国したの？』と聞かれて、『いいえ』と答えしても、『最近中国からの友達と接触した？』と相手が非常に不安そうに確認し続けた。仕方なく『最近帰国してない、帰国しようにもできない』と返事した。でも、中国がおさまった頃からそういうことが少なくなった。」

「2月中旬の頃バイト先のお客さんが、自分が1月末に中国に行って今無事に日本に戻ってきたことを自慢げに、その場で唯一の中国人のわたしにわざわざ教えた。変な人だなと思った…それから日本の状態も厳しくなってから、またバイト先で、あるお客さんがわざと私に『大丈夫ですか、お母さんも大丈夫？』って気に掛けながら尋ねてきた。その気配りは見せかけだけで、すごく腹が立つ。その時日本も結構厳しくなって、こっちに心配そうに話かけてくるより、自分のことを心配したら？よく『コロナが怖い、電車が怖い』と言ってもさ、マスクもちゃんとつけてなく、逆にそのストレスをこっちにぶつけたり、こっちに移したり…どうしてこう、責任を押し被せられる感じになったのかな…」

「わたくしはこの研究室に4月からきているけれど、まだ東京の新宿の薬局でバイトしていた武漢封鎖の前後の頃、レジで会計する際、中国人店員はみんな武漢出身のお客さんに対して不安があって、たまに武漢出身を否定したとしてもパスポートチェックで実は武漢出身が判明したお客さんがいた。その武漢からのお客さんも怖かっただろうし、私たちも怖かった。」

このように、中国人だと分かるとすぐに遠ざかる他者、バイト先で最近の中国帰国歴を何回も確認し自己安全を確保する客、また他人事として気配りにしてくる過剰な親切の客など、日常生活で出会った人の何気ない言動に傷つけられていることが、留学生の語りから見えてきた。加えて、コロナ禍において、中国人が他国の人々に忌避されたことがあり、さらに感染が世界中に拡大する中、最初の流行地の中国に「責任を押しつける」という声が上がってきた。一方で、中国人が他国の人々に忌避されることと同様に、中国人同士では、武漢以外の出身者が武漢出身者を忌避する傾向も見えており、それはもはや二重の忌避の存在が示唆される。

しかしその一方で、在日中国人への忌避は、日本社会からのみならず、母国である中国からの忌避感情も様々な形で露呈してきた。コロナ以来、中国政府が輸入感染ケースを防ぐために、帰国者に入国後、直ちに指定のホテルで2週間の隔離を強制的に要請している。隔離にあまりにも時間をかけすぎるという理由により、やむを得ない場合のみ、今の時期は帰国しないというのは、筆者が聞く限りにおいて、在日中国人留学生の中で

主流の考えである。また、中国国内では、家族のメンバーの中に海外にいる人がいれば、事前の安全確認のために、市政府や区政府の役員から海外者の帰国予定があるか否かを確認してくるというように、中国ではコロナ輸入感染対策の一つとして徹底的に実施されている。それは一見すると、防疫上の万全な対策だと思われるが、実際にコロナ禍の特殊な時期において、自分の母国である中国側から「リスクの高い海外者」と見なされる留学生の気持ちはかなり複雑で、その対策を受け入れつつも、それに関する議論では、次のように盛り上がっていた。

「(中国) 国内では、これまでとても厳しく対応していたので収束したと思えるが、逆に日本の方が緩い気がして、ちょっと心配。最近、故郷の政府から 200 枚のマスクを日本の住所に送ってきて応援してくれた。でも『帰ってこないでね』って言われた(笑)。(区政府の役員が) 毎日お母さんに電話して、『娘さんに帰ってこないでって伝えてください、マスクを送ってあげるから』っていう。」

「あったよね、私も。公務員システムに勤める人は、自分で報告すべきだ。家族には、武漢からくる人、リスクの高い区域から来る人、海外からの人がいるかどうか。」

「区政府かなんらかの方が、お母さんに連絡して『娘さんが海外から帰ってくるとすぐ連絡してください』って、『しばらく帰国する予定がない』と答えると、『それはいいですね』って言われたって。」

「私も、お母さんから聞いた。」

加えて、中国のソーシャルメディアのネット空間上で、中国では中国人留学生への攻撃もあったようである。

「そういえば、ソーシャルメディア上の言葉の暴力がすごいね。ウェイボでは、『留学生は帰ってこないで』という声が結構あった。」

「そうそう。この間、大連にいる帰国留学生が隔離を拒否した。その事件をきっかけでそういう討論がネット上で盛り上がったかも。」

海外にいる留学生たちは、上述のように地域政府の安全確認の連絡がきたということを経験して知った。しかし、研究のために中国の現場に行きたいのにと心で焦っている留学生たちが、「帰ってこないで」と母国側に言われても、黙って受け入れるしかないのである。加えて、ネット上の口論にも抵抗を感じていた。要するに、日本の

生活では中国人とされ、遠巻きに見られている留学生たちは、母国の中国からも高いリスクの海外者として受け入れてもらえないのである。こうしたことから、在日中国人留学生は、日本社会と中国社会のどちらにもアイデンティティを確立することが難しく、両社会の境界に生きており、今回コロナを機に、社会の事態から目に見えにくい形で排除されやすい状況にあり、その境界性が一層強まっていることが示唆された。

3-4. コロナによる絶え間ない変化に対処する中国人留学生の姿

コロナによる学業の影響に関しては、上述のように、研究の調査上の対面インタビューをオンラインで実施することへの調整があった他、現地調査の代わりに文献調査で研究を進めるという対策もあった。こうして移動制限がある中でも積極的に研究の遂行の努力している留学生の中には、「留年に心の準備もできた」との声もあったことから、研究の計画が変更されたり延期されたりすることに悩んでいる学生の姿が伺える。また、コロナの影響で授業がすべてオンラインになったことは、授業中の議論が冷たくなるとのデメリットが挙げられるとはいえ、決して悪いことばかりではない。次に示す語りのように、コロナを機にネット上無料で公開された教育資源が増えること、また通学時間を省くことで便利になったという声も見られた。

「コロナをきっかけで、たくさんの大学講座が無料で公開され、教育改革にとっていいことかも。」

「オンライン授業が従来の授業方式を変えるとか、そういう議論が最近盛り上がっている。授業が全てオンラインになったら、化粧しなくても気軽に授業に参加できるし、授業の負担が減ってくる。」

「オンライン授業で、書面資料が多くなり、事前予習が可能になった。」

コロナ禍において物理的には動きにくい身体であり、窮境であるからこそ、逆に教育改革のような前向きな挑戦的アイディアが出てくるのかもしれない。こうした学業の問題は自分の意志で計画を変えることができるが、他人接触との場面では、以下のように難しい面もある。

「不思議だと思ったのは、われわれ（在日中国人）が当時怖かったので、ちゃんとマスクをつけて出かけたのよ。日本人が怖そうに見えたが、なぜマスクをつけなかったの？」

「2月に東京を離れた日に日本人の先生と会って、先生がマスクつけてなかったので、多分マスクを持ってないかなと思って聞くと、『持っているよ。面倒臭いからやめとく』

と言われた…日本人が **SARS** の経験がなかったので、そういうことを気にしていないのかな。」

在日中国人留学生の場合、母国でコロナの感染流行が先行したことから、防疫意識や防疫行動もそれなりに日本人より先行しており、それゆえにマスクをつけないという日本人の無防備さに不満の声が聞こえた。これは、上述の背景で述べた在日中国人が渋谷でのマスク配布運動の日常における延長のようなものとも言える。

しかし、不満や不安を感じたとしても、日本は **SARS** の経験がなかったからと解釈し、自分自身を納得させようとしている。同じく、上述のバイト先で無事に中国から戻った日本人の客と出会った留学生の語りから、傷つけられてから文句を言うより、「多分当時、コロナは中国で厳しかったが、日本ではまだましなので、こんなに大変なことになったとはあの人も思わなかった。だから自分がラッキーな人だと自慢していたのかな」というふうに相手の行動を解釈し、合理化しようとする傾向が見えてきた。相手を攻撃するより、相手の立場を考え、その行動を理解しようとする努力も、コロナによる不愉快の思いへの対処策の一つと言えよう。

さらに、コロナの事情が日々変化している状況において、留学生もその変化を実感して次のように語った。

「最初は感染人数を毎日チェックしていたが、どんどんそれも見ないようになった。その数値が信用できないから、誰も見ない。報告された数値よりずっと高いと思う。」

「最近、ある在日中国人のネットグループに参加して、そこで日中のコロナ状況についての討論が激化している。最初は日本の対応が緩いと考えていたが、それから日本の状況も収束してきてから『国の状況によって対応もそれぞれ有効だ』と考えるようになった。しかし、再び第二波がきてから最近『やっぱり対応不十分だ』っていう考えもでてきた。やはり世論は状況によってずっと変わり続けている気がする。」

このように、政府公開の感染人数の信憑性、在日中国人の日本政府の対応への評価等がコロナ流行事態の変容によって変化していくことが、留学生もその傾向を二次的に観察しつつ「変化」の存在を理解している。加えて、上述したように中国のネット上の留学生に対する暴言があったとはいえ、それに猛反発するよりも、暴言を誘発する発祥事件を知った上で冷静に考える留学生の姿が読み取れた。コロナの感染事態が絶え間なく変化している中で、膨大な情報に混乱しないために、変化しているということと暴言の根源を理解した上で冷静に判断するというリテラシーが大切になると、留学生のこうした経験から学ぶことができる。

4. 社会人である在日中国人のライフストーリー

前章において、在日中国人留学生を対象に、フォーカスグループインタビューを行った結果、留学生にとって社会に関わる場面が限られているにもかかわらず、この間の変容を強く意識し、様々な影響を受けていることが明らかとなった。そこで、本章では、学生ではなく、日本で就労しているため、より日本社会の動向の影響を受けやすいと考えられる社会人の在日中国人3人を対象とし、ライフストーリー分析を行い、コロナ事情の変容による個人の考えの変化に着目し、さらに急変する社会に柔軟に対応しながらそれぞれの選択をしている生き方を具体的に捉え、考察に導いていきたい。

4-1. クルーズ船の近くに住むC氏のライフストーリー

C氏は今年26歳になる女性で、2016年に日本に留学し、2年半大学院在籍してから修了し、2018年から横浜の大手会社に就職した。

1) 自分にとっての「初期」におけるコロナへの警戒の呼びかけ

2020年1月、武漢をはじめとして中国全国でコロナが流行していた際、C氏は仕事で日本にいたが、家族の安全が心配になり、中国で売り切れになっているマスクや消毒剤などの物資を日本で購入して中国に送った。またマスクを着用したり、消毒などの感染予防の行動を周囲の人より早く始めた。2月に、中国側の感染状況が一層深刻となり、2月中旬に感染はピークに達した。それに対して、日本国内での初めての感染死亡者が発覚し、感染している乗客を乗せたクルーズ船が横浜港へ入港した。すなわちC氏が勤める会社のすぐ近くに停泊したという。C氏がその時期、どのような思いで対処していたかは以下の語りから読み取れる（2020年5月の時点での語りであることに留意）。

「その時まだ仕事で毎日会社に通っていた。電車で通勤する時、マスクつけたり消毒剤を頻繁に使ったり、身の回りが細菌だらけだと思ってしまうほど、めちゃくちゃ高度警戒の状態だった。その時、日本政府の対応も殆ど見えないし、中国の対応と比べると遅い、しかも弱いと思った。ニュースによく出てくる感染のクルーズ船が、すぐ身近の港に泊まっていて、その乗客がクルーズ船から降りて、感染の可能性あるかどうかまだ分からない状態でその場でぱっと全員解散させていた。私が上からそれをずっと見て、もっと隔離すべき人々が普通に交通機関で移動するとか、それを見て、本当に……吸っている空気さえ汚いと思うほど怖かった。」

「その時から、同僚のもう一人の中国人と一緒に、コロナの厳しさを他の同僚に伝えようと、時間ができたらすぐ呼びかけをした。でもうちの上司が、アメリカ人で、『ただのインフルエンザだ。Cさんは大げさだな。』と言って、本当にむかついた。ほかの同僚は

『怖いね』と応じて、防疫行動もちゃんとしていなかった。その時私が一番怒っていて、焦りもすごく感じた。それから、日本の感染事情が厳しくなって、マスクも何処でも売れ切りの状態になって、みんなようやく不安そうになった。その時、前買ったマスクをオフィスに一箱おいて、消毒剤も用意して、必要な人が自由に使ってくださいって伝えた。マスクは、自分用でも足りない。でもみんな無事だったら私も安全だろう。」

以上のC氏の語りから、C氏は、日本社会と異なる時間感覚を持っていることが分かってきた。C氏によると、「初期」という言葉は1月2月を指し、中国国内でのコロナ流行の「初期」ということである。それゆえに、実はコロナの流行前からずっと日本にくらしているC氏の感染予防は、日本社会のそれよりも早く、むしろ中国とリアルタイムで予防意識と予防対策を始めている。

またC氏の語りから、「初期」という言葉は、日中感染状況の差異によって、日本政府と中国のそれとの対応にも時間差が生じており、さらに、後発の日本社会に暮らしている同僚や上司と先行国出身のC氏の間には、不安など心理面での時間差もあることが見受けられた。会社内で自発的にマスクを配るというエピソードから、中国人としての予防先行意識が伺えるだけでなく、自身が日本社会に暮らす生活者としての、周りの人々への呼びかけや気配りも見えてきた。C氏の場合、こうした日中対応の時間差に暮らしている何ヶ月間が一番辛かったが、日本側の本格的な対応（緊急事態宣言発令）が進んでくるにつれて、その辛い心理的なストレスが徐々に和らいできたようである。こうした状況から、コロナへの対応に対し、C氏は母国の中国と強く繋がっている中国人の側面および日本で暮らす日常生活者の側面が両方見えてくるだろう。

また、同じくコロナ初期の記憶に対してであるが、この間、聞き取りの調査を何度か行ったところ、C氏の解釈が徐々に変わってきている様子を読み取れた。上述したのは2020年5月の語りであったが、8月の時点での「初期」についてのC氏の語りは、以下の通りである。

「初期には、日本人の同僚は中国の状況をわかってくれて、私に気配りもしてくれて、みんな優しいと思う。今考えると、日本人の同僚とアメリカ人の上司の当時の反応は何となく理解できるようになった。上司に『大げさだ』と言われていたよね、当時。怒っていたけれど、上司のアメリカ式の考え方を变えるのは不可能だし、そもそも变えようとも思わないし。逆に彼の立場に立って考えると、彼は私の「大げさ」を尊重してくれたかもしれない（笑）……初期には、中国人として自分なりに早めにコロナの厳しさを伝えようと努力した。自分の話に影響を受けた人もいるが、受けていない人もいる。でも、他の部門と比べると、うちの部門にはマスクをつけた人が多いので、ある程度自分の呼びかけが効いていたのではないかと思います。」

このように、アメリカ人の上司の考え方を变えるのも「不可能だ」という C 氏の話から、在日中国人として母国と共通する苦しみの経験があるからこそ、上司や同僚と日常一緒にいるとはいえ、自分にとっての「初期」の時点では、むしろ他次元に生きているかのごとく不安を共有できない無力さやコロナのリスクに対する感覚の違いを感じていたことが分かる。よって、日本と中国の社会の狭間に生きる「境界性」がコロナ禍の影響により、一層強まっていた状況が示唆された。

2) 「運命共同体」の解釈

ここで、C 氏が発した「運命共同体」¹¹⁾という言葉の意味解釈について、考えてみたい。

「『初期』は、当時中国国内は感染ピークの時期で、毎日ニュースを読んで、非常に残酷な死亡人数と物語ばかりが目にとまり、それを読んで心痛くなり落ち込んでいた。日本という海外にいても、その時は「私は、中国と運命共同体だ」という気持ちがかかなり強かった。」

「その後、中国の感染状況が収まって、日本の感染人数が上昇してきた（3月～4月）。3月の末のある日、会議中なんだけど、社内電話が入り社内初の感染が出たって。電話が切ってからその場で全員解散、自宅のテレワークがその時から始まった。それから、社交的活動がいっさいなくなって、自分が変になった。それを改善するために、同僚とオンライン食事会をして、自炊で料理作りをして気分転換を図っていた。その時から、（中国）国内に対して特に心配はないので、こっち（日本）の方が皆大変だなと感じて、日本のみんなとも『運命共同体』になったと思う。でも、アメリカとか、世界中でも大変だし、世界のコロナ事情が繋がっているから、世界全体が収束しないと、コロナはまだまだ終わるとは言えない。」

C 氏のライフストーリーを踏まえ、彼女は自分にとっての「初期」の時点では、中国国内および会社の中国人の同僚を「運命共同体」というように呼んでいたが、テレワークが開始され、日本でも本格的な対応して始まった後、「日本のみんなとも運命共同体になった」と考えている。さらには「世界のコロナ事情が繋がっている」と共同体の範囲を広げつつある C 氏の語りの変化が印象的である。それは、テレワークおよび中国国内のコロナ収束による心理上の緊張が鎮まってくるとともに、世界中の事情が日々変化していく中で、C 氏がより冷静にコロナ問題を考え直すことができるようになったと考えられる。

4-2. PCR 検査経験者の新規社会人である H 氏のライフストーリー

H 氏は 26 歳の女性で、来日 3 年目、今年 4 月に金沢の大学院を修了し、金沢の企業に就職した。しかし、7 月に異動により東京へ赴任することになった。ちょうど都内でコ

コロナ感染者人数が高まる時期でもあり、東京へ移動せねばならない H 氏は、どのような思いを持ち、どんなことを経験したのかをまとめていく。

1) 金沢から東京へ：新規の社内移動

4 月の時期、H 氏は金沢の地元企業で就職をはじめ、自分が 2 年半も住み慣れた金沢で暮らしつづけることに満足で、コロナに対して下記のように語っていた。

「(中国) 国内でコロナ流行してきた頃、ずっとコロナのことに注目していた。厳しかったと知っているけど、金沢は田舎だからあんまり人もいないので特に実感がなかった。最初は地元市役所の HP の公開データをフォローしていたが、どんどん止めた。東京や大阪が厳しいとニュースで聞いたんだけど、やはりこっちは違うよね。」

ただし、5 月から、東京への移動命令が降り、H 氏自身は人が多く集まる場所が嫌なので、大都市への移動には抵抗感があり、それに加え、東京の感染状況が日々拡大している事態で移動させられることで、H 氏は不安そうに連絡してきた。

「前に金沢が私の居場所って言っているじゃん。なんか会社のルールみたいで東京に移動しなきゃ。最初みんな東京とか大阪とか就活で必死に通って、でも、私は金沢でいいって思っていた。そんなに人がいっぱいなところ……私が東京に移動するって聞いて、『東京が危ないよ、気をつけてね』と日本人の同僚によく言われた……この前東京の出張から帰ってきた先輩がいて、課長から『東京からなの？ あっちに行け行け、危ない』って大げさに言われて、冗談だけどね (笑)。でも東京が怖いって、みんなそう思うらしい。」

東京への移動する前に、抵抗感を持ち、不安に思っていた H 氏の様子がみえてきた。7 月に正式に東京に引っ越した H 氏に、どのような状況かを連絡して聞いてみると、下記のように語っていた。

「意外と早く慣れたね、新しい部屋は綺麗で結構お気に入り。住んでいる部屋が心地よかったら、なんか新しいところで始められそう。でも、通勤はしんどいよ。ちょうど一番混んでいる路線で通勤して、毎日そんなにいっぱいの人に押しつけられて、最初は不安だけど、今もう、どうしようとも無駄と思う。もう疲れている、鈍くなる。」

H 氏の話によると、最初に移動命令しかもコロナ禍においての都会移動への抵抗感が見えており、しかし実際に感染リスクの高い東京に移動したら、逆にコロナに対して鈍感になってきたようである。理由としては、通勤の辛さ、毎日大勢の人と接触するので、「どうしようとも無駄」という無力さ、またコロナの事態が長く続いていることに対する

心の疲労があることが示唆された。

2) PCR 検査の経験：家族に語れないこと

8月5日に、会社内で感染者が発見され、その場で全員解散となった。そしてH氏は、間接接触者として自宅隔離を要請された。その帰宅途中の電車で、H氏が筆者に連絡してきた。

「今大丈夫じゃないよ。感染した人がなんか、私の手前に座っているおばさんとよく接触があったので……会社のみんな結構落ち着いているそうで、私がPCR検査をしたいと言ったら、逆にそんな必要がないと言われた。でも検査を受けようとしても、病院に行く途中で感染してしまうことが怖い。あと、会社が検査費用を負担してくれるって。私、入社したばかりでまた何もできてないのに、会社のお金を使うなんて……」

その翌日、「同僚（日本人）は、何人か検査を受けたと聞いていたが、本人に聞こうと思っても、そんな事は言えないだろう。」とのH氏のメッセージが届いた。そして8月7日、H氏はようやくPCR検査を受けると決意し、3日後、ソーシャルメディアで「無事でした!」という内容を発信している。

その1ヶ月前の7月には、H氏はコロナに対して鈍感のように見えたが、その時は、仕事のストレスや疲れが先行していて、コロナへの怖さが隠されていた部分もあったが、身近に感染者が見つかった瞬間、何倍にも怖さが増したように思われる。一方、中国での感染における惨事の記憶が焼き付いていることで、感染者が出るとすぐPCR検査を受けたいと思うのが中国人らしい側面ではあるものの、こうしたH氏の語りから、検査費用の負担など新入社員ならではの心遣いもあり、そうしたことも日本社会で生きる生活者としての側面がより見えてきた。

現在テレワークが日常になったH氏は、当時を振り返りつつ、以下のように語った。

「当時怖かったのは、帰宅の電車の中で電話した時。その一瞬かな。家に帰ったらもう、何をやるべきかを冷静に考えていた……同僚は親切な人で、困る事があれば言ってくださいと言われたが、やはり自分があんまり同僚に生活相談とかもしたくないから、仕事は仕事、一定の距離を置いた方がいいと思う……両親にも言っていなかった、今でも。言ったら心配してしまい、帰ったらいいよとか絶対言うだろうから。毎日電話5本くらいもくるかも。そんな話を言って、何も役にも立たなくて、逆に負担になる。」

こうしたH氏のライフストーリーから、感染の不安やPCR検査を受けるか否かについて、最初から最後まで同僚にも家族にも相談せず、逆に側にいない友達に相談を乗ってもらったり自分で判断したりする姿がみえてきた。H氏の場合は、中国最初の感染に

おける惨事の記憶があり、感染リスクに気づいた瞬間に日本人よりも敏感に反応したと考えられる。その後の対応については、日本の状況が分からない家族には話しにくく、まだ感染したかどうか分からない状態なので身近な人たちにも相談しなかったのも、遠方にいる友人にストレス発散し、また自らの状況を判断して対策を考えていた。今無事に職場に戻っている H 氏は、電車に乗るのが怖かったのと同時にその後の対応から、自分しか頼れない孤立無援の中に入り込んでしまい、自身を頼るしかなかったことが分かった。

4-3. 武漢出身者の L 氏のライフストーリー

L 氏は 25 歳の女性であり、コロナの中国最初の流行地である武漢市出身である。彼女は 2016 年来日し、一年間日本語専門学校に通ってから、京都の大学院に進学し、2020 年 3 月に修了して 4 月から京都のある会社に就職する予定であった。2020 年 1 月 20 日に一時的武漢に帰省した時は、修士課程修了の直前であり、修士論文公聴会を準備している最中で、仕事の内定をすでに手に入れ、2 月 2 日に日本に戻る予定であった。しかし、1 月 23 日からの武漢都市封鎖により、一連の計画が潰れてしまったのである。こうした激変の中で、L 氏はどのように対処・調整してきたのかについてのライフストーリーをまとめてみる。

1) 絶望の武漢封鎖

L 氏は武漢封鎖について次のように語っていた。

「大学を卒業すると、しばらく帰国する時間がないと思ったので、今空いているうちに短期でもいいから武漢に帰ろうとした。その時コロナって多分大丈夫... と思ったが、結局都市封鎖になるとは想像していなかった。その時、死ぬほど大変だった。1 週間ぐらいの帰国を予定していたので、パソコンも *ipad* も一切持ってこなかった。実家に帰っていたので *wifi* もちゃんと付いてなかった。修士論文公聴会の準備をしようと思って、友人からパソコンを借りたのだけれど、当時警戒がすごく厳しくて、普通の移動も難しかった。警備員に何回も頼んで、例外としてパソコンを渡してくれた。すべてのやりとりはメールで進んで、公聴会もオンラインで、大学の先生も結構協力してくれるから、一応無事に終えることができた。それから日本の賃貸部屋の解約もしなきゃいけないので、日本にいる友達に頼んだ。荷物の片付けは、部屋の鍵を持たなきゃできないので、その鍵を国際郵便で送った。でも鍵が金属製品で税関は通らないかもと言う話もあって、鍵を入れた箱にメモをつけて、自分の状況を書いた。最後に『大変な時期で、ご家族のご健康とともに祈っています。』と書き添えた。ちょうど卒業の時点で、いろんなことや手続きをやらなきゃいけなかったけれど、結局家に閉じこもってどこでも行けなかった。その時本当に絶望した。」

「それらのことがいったん落ち着いたら、家でちょっと疲れていた。ニュースを見て外にも出ていけなくて、3月の下旬になったときにはもう崩れちゃうと思った。ちょうどその頃に封鎖が解除された。ほっとしたものの、外にはまたリスクが存在するなと思ってまた怖くなった。」

このようなL氏の語りから、一時帰国以後、コロナですべての状況が変わってしまった。武漢都市封鎖で自宅に閉じこもっていたものの、実際には一刻も絶えることなく学業と部屋の解約のことを気に掛け努力していた姿が見えてきた。コロナ自身がもたらしめている感染のリスクよりも、コロナにより国境を越えることができず、重要な時期においても計画が展開できないことに絶望している側面がみえてきた。

2) 故郷に留まりたい

武漢封鎖解除後においても、国際間の移動制限は、益々強まっている状況において、L氏はいつ日本に戻るのか分からない状態なので、待っているより何かやろうという思いで、武漢のある国営企業でバイトし始めた。聞き取りをしたうちの5月の時点では、L氏はもう一ヶ月間、ここでバイトを続けており、この経験から武漢で就職しようと考えはじめていた。

「日本の会社側からは、『在留を延長しますよ』との連絡をくれたが、実は今日本に戻るかどうかを悩んでいる。コロナのことと関係なく、(中国)国内の変化があまりにも激しくて、今みんな普段何のアプリを使って暮らしているのか全然分からなくなっちゃう。みんなのペースも速いし、もう追いつかない気がする。最初は日本社会で何年間働いて、海外の仕事の経験を持って中国に帰ろうと思ったのだけれど、今の状況を見て、何年間後、私が国内発展の速度に追い付けるかなと心配になる。この間家で過ごしていて、家っていいなと思う瞬間が結構あった。もう根の付けないところに居たくない。家が恋しくなる。そばにいて欲しいって両親にも言われた。」

L氏は、日本での就職から心が遠ざかっているようだが、中国の大都市の北京、上海での就職は考えているかどうかを尋ねられると、以下のように語ってくれた。

「考えたことないね。この前、友達の友達が北京でクビされたらしい。出身が武漢だからって。うまく言葉にできないけれど、これが「湖北省の痛み」だな(笑)。湖北は「重災」、ほかのところはむしろ「浄土」だ。差別ということは、あるはずよね。実際にはわかんないけど。」

8月に再びL氏の聞き取りをした際、以前のバイトをやめ、7月から武漢にある大学

で仕事を始めていたという。

「(中国)国内の就職準備も大変で、この間疲れていた。日本の会社も正式にやめた。メールで連絡した。むこうも私からやめますって言ってほしかったかも。ルール上はクビできない状態で、実際にずっと日本に戻らない社員になってしまうよね。最近、みんな武漢に帰ってくるらしい。海外の人も、北京上海の人も。多分コロナでわかったよね。北京、上海の私営企業ってリスクが高いよ。不景気になったらすぐにリストラする。やはり故郷の国営企業が安定だと、みんなそう言っていた。」

L氏のライフストーリーから、コロナ禍において仕事を転換せざるを得ない状況で、人生の選択が一変したと明らかとなった。つまり、一時帰国の際に突然受けたコロナの隔離をきっかけとして、中国国内に長期滞在することになり、国内の環境を改めて観察するとともに、日本での情報も間接的に得ながら、コロナという惨事の中で、改めて自分にとって大切にすべき事柄は何かという側面から将来の進路や自分の生きる場所を考えていたと考えられる。海外の就職内定を取り消し、故郷を選んだというその選択経緯から、物理的な移動制限で仕方がないと思っている部分もあるかもしれないが、それでも心の内面ではコロナをきっかけとして沸き上がってくる故郷の苦難の享受の中でもたらされた心の安らぎや愛着が読み取れるのではないか。他方で、武漢への中国の他地域からの差別が実際に存在しているかどうかは、目に見えるものではないので言及できないが、武漢出身のL氏が同郷の友人たちが受けたという差別の存在を信じていたことは、武漢出身者が災害後に後ろめたさを感じているとも言えるが、ここには、「アイデンティティの内巻化」という重要な課題が見え隠れしているため、次章にて改めて論じていくこととしたい。

5. コロナ禍に生きる在日中国人とその境界性

3と4の二つの章において、在日中国人留学生の語り及び社会人の在日中国人のストーリーから、コロナ禍において、彼ら彼女らは、様々な経験と記憶を残していることを描写してきた。さらに本章では、コロナ禍の社会実情と合わせ、コロナ禍における在日中国人のまなざし及びその生活を中心に考察を深めていきたい。

5-1. 初期において強まった在日中国人の境界性

コロナの感染拡大のリスクは、最初の中国武漢を起点にどんどん世界中にも広がっていく状況の中で、特に日中対応の時間差の時期には、それぞれの社会の狭間に生きる在日中国人の境界性が著しく強まっていることが、本研究から明らかとなった。

留学生たちのフォーカスグループインタビューにおいて分かったこととして、日常的

に不愉快な視線や親切すぎる気配りなどに気づいており、普段同じく日本社会に暮らしているにもかかわらず、コロナの影響で中国出身というアイデンティティが、他者の視点から型に嵌められ、息苦しい思いをしていることが分かってきた。他方で、母国の中国においては、行政上でも WEB 上でも「留学生は帰ってくるな」という論調が盛り上がり、海外在住者というアイデンティティが誇張され、排除されている。コロナ以前までは、国境を超えて自由に移動でき、日中両国社会の良いところが同時に享受できると思われる留学生たちにとって、コロナで移動が制限され、ゆえに学業の進展が行き詰まるだけでなく、暮らしや学業の場がある日本社会と母国の中国の両方の社会から見えない形で排他されようとしていたのである。

一方、仕事を持つ社会人のうち横浜の社会人と日本企業の内定を取りやめた武漢出身者のライフストーリーからも、同様に初期における境界性の強化が顕著である。そして C 氏が日中対応の時間差に不安を感じつつ身近の人にコロナ警戒を呼びかけたものの、「大げさだ」との返事を受けて失望している。こうしたことから、母国において先行するコロナ記憶が、日本では身近な人々と共有できないことから、心理的な境界が強まっていると考えられる。また L 氏の場合、武漢都市封鎖の中、自宅から外に出ることのできない一ヶ月間の過程で、物理的に動くことができなかったとはいえ、自分の人生にとって大事な日本での学業と引越しの手続きについて、一時も心休めずに必死に克服しようとしたが、結局、心身共に長期的に日本と分断されることにより、武漢において改めて就職することを決意したのである。加えて、中国の他地域からの武漢への偏見を受けている気持ちになり、日本だけでなく中国の他の地域にも帰属感が感じられないという「心理的な二重の境界性」が読み取れるであろう。したがって、コロナによる移動の制限で、境界性が物理面から心理面へと強まるとともに、日本と中国の他地域からの境界という、二つの意味での「二重の境界性」の存在が示唆され、またその内実は複雑であることも分かった。

こうして、特に初期における在日中国人の境界性が顕著になった理由には、下記の 3 点があると考えられる。まず一点目として、日本と中国の国家システムの差異による政府対応の違いである。中国では、感染者と接触者を特定するテクノロジーを導入し、また政府が徹底した強制的とも言えるコロナ対策を講じたため（梶谷，2020）、コロナの急速な拡大を短時間でおさえるには有効であったと言える。それに対して、曖昧かつ弱く映る日本政府の対応の中で暮らしている在日中国人は、日本人との間には不安の差異が生じるのは当然の流れであろう。その一方で、安心感を与えてくれるはずの母国では、輸入感染を抑制するために強制対応を一貫しており、海外在住者と見なされる留学生の帰国を忌避していることは、より一層境界性の壁を高くしている。

二点目として、在日中国人にとって、コロナ先行国出身ゆえの恐怖の先行と後ろめたさである。在日中国人は、母国での感染惨事の強い記憶を日本のコロナ流行前に感受しているために、恐怖感も日本人より先行し、さらに、武漢出身者である L 氏が最初流行

地からの後ろめたさを感じると同様に、在日中国人は、日本人を含めた他国の人たちを前にこうした後ろめたさも少なからず感じていたかもしれない。それゆえに、敵意の視線や言葉に対して、通常よりも敏感に感じ取っている側面もあると考えられる。

さらに三点目として、コロナで世界中が落ち込んでいる雰囲気の中で、国際政治の言論に左右される部分もあったかもしれないが、人々はストレス発散も含めて、コロナの最初流行国を攻める傾向が見られた。しかし、その一人一人の僅かな攻撃的な行動が、結局境界人への排除に加担した可能性もあったことを、今一度思い起こしてみる必要はあるのではないだろうか。

5-2. 時間の経過による変化と境界性の緩和

前節では境界性の強化を論じたが、本稿執筆時では、コロナの流行とその継続から9ヶ月が経っていることもあり、時間の経過に伴い、コロナの事態も日々変わっているため、コロナ禍に生きる人々の考えも大なり小なり変化している。こうした変化の中で、在日中国人の境界性が逆に緩和されていることが、本研究から明らかとなった。

留学生の語りからも垣間見られるように、コロナに関連する日常の不快なことは感染初期に集中している。そして、5月以降は日本でも活動の自粛や移動制限処置がとられたため、日常で不快なことを感じることはほぼなくなった。また、時間経過による差別対象も変わってくるとの意識もあった。また、社会人のC氏の場合は、初期に極めて不安であったが、4月からテレワークが開始され、さらにその後、長時間の在宅ワークをすることから、コロナに対する不安が抑えられることにより、初期における周りの反応や日本政府の対応などについて、冷静に考え直し、振り返ることができており、さらに「運命共同体」への解釈も最初は中国人同士から、徐々に世界中のコロナと戦う人々へと広がっている様子が伺えた。ここから、時間の経過に伴いコロナの事態も変容しており、より時間が経過していくと、より冷静に受け取った情報を整理し、自分の考え方を修正できていくことが分かった。一方、H氏の場合は、地方から上京するという社内移動、また同じ会社での感染者の発見という、コロナ禍の一連の出来事の中で、心理的な不安がそれに応じて高まったり抑えられたりというように、客観的な社会感染状況に影響されるというよりも、個人が遭遇する身近な事態に応じて変化している傾向が見て取れた。すなわち、コロナ禍においての不安感情は、動態的に変化しうるものであり、さらに必ずしも一定のパターンに沿って変化していくものでもなく、個人の独自の体験に応じて人それぞれ多様に展開されていくことが示唆された。

こうした変化を伴うコロナ禍の中で、在日中国人の境界性が初期に強まっていたが、その後、徐々に緩和されていく傾向も見受けられた。例えば、留学生たちの語りから、嫌な思いや不満があったとしても、フォーカスグループインタビューを実施した8月末の時点において、それらの経験を相互に共有する際、「SARSの経験がない」、あるいは「その時日本ではまだましだ」というように当時の社会実情に合わせて相手の行動を合理

化させようとする意味解釈が伴っていた。さらに、C氏の「運命共同体」に対する解釈の変容や初期にアメリカ上司と同僚の反応への振り返りによる再解釈からも、時間の経過によって相手の行動を理解するために相手の立場に立って考えようとする努力が読み取れた。そこから、在日中国人はどちらの社会に帰属するのかを考えるのではなく、身近の人の行動を理解することに工夫を凝らすことによって、コロナ禍における境界性を緩和させることができるという点は、重要なのではないかと感じた。

このような他者理解による境界性の緩和は、長く継続しているコロナ禍に対する、在日中国人にとっての、自分自身の暮らしや環境へ適応した結果であると考えられる。コロナの初期における混乱の中、焦りと不安でお互いに攻め合ったのは避けられないことであったかもしれないが、9カ月経過した現在、コロナ禍に生きながらも、出来る限り日常の生活に戻りたいと誰しもが思うことである。こうした思い直しからも、攻撃者の相手の行動を再解釈し合理化することによって、自分の精神的な負担を減らし、他者理解を通じて平穏な生活環境を再構築している。それは、在日中国人としてコロナ禍に強化した境界性の狭間を生き抜くために、境界を緩和させようとする努力の現れとも言えるであろう。こうしたより良い生活を取り戻すために、困難の中でも積極的に他者理解に努めている姿に、境界人として賢明な生き方を我々は学ぶべきではないだろうか。

5-3. アイデンティティの内巻化

以上、境界性の強化とその緩和という視点から、在日中国人の経験や記憶を考察してきたが、最後に、武漢出身者であるL氏のライフストーリーに見られるコロナ禍を通じた「アイデンティティの内巻化」という課題を改めて、考察していきたい。内巻化(*involution*)とは、外向けの発展が限られた中で内的に独自の複雑化を遂げる状況を指した学術用語である。上述のように、武漢出身者は、日本と中国の他地域からの境界という「二重の境界性」の存在が浮かび上がり、またその内実は複雑であることを述べた。つまり、日本人とは異なるアイデンティティという以外にも、母国においても他の中国人と異なるアイデンティティが主として「外側から」構築されていく、という事実到我々は目を向ける必要があるのではないだろうか。こうした境界性は、コロナが収束していくことで、ある程度解消され、歴史的事実として客観的語られる事柄や人々社会的記憶の中では忘れ去られてしまう場合も少なくないだろう。しかしながら、このことを切っ掛けとして、一人の人間としての人生の選択を変更してしまうという大きな変化を余儀なくされて今後を生き抜く人々が、これからも抱えて行くであろう個人的記憶の重みがあるように感じる。つまり、自分ではない他者からの集団への帰属の欲求あるいはそれへの排斥が、時として他者に対する恐怖にもつながってしまうのである。概して、差別や偏見といった言葉で括られない内実の中にも、グローバル社会に生きる我々にとって考えうる事柄があることを論してくれている。特に、目に見えない繊細な心の揺れ動きは、数値で明確に表すのは難しく、また心の奥に閉じ込められたままで、概して見過ごされ

がちであるからこそ、なおさらであろう。

ここで、作家アミン・アマルーフが『アイデンティティが人を殺す（訳本）』（アマルーフ 2019）で述べている、下記の言葉を引用しておきたい。

「私たちの誰もが、自分自身の多様性を受け入れ、自分のアイデンティティを自分のさまざまな帰属の総和として思い描くことができるよう励まされるべきです。自分のアイデンティティはただひとつしかないなどと思っはいけません—それは至高の帰属とみなされ、排除の道具、ときには戦争の道具になってしまうでしょう。とりわけ出身文化が自分の生きる社会の文化と一致しない者たちに関しては、この人たちがあまりつらい思いをすることなく、この二重の帰属を受け入れられるようでなければなりません。彼らが自分の出身文化とのつながりを維持し、それを恥ずべき病気のように隠さなくてはいけないと感じないで済むよう、そして同時に、彼らが受け入れ国の文化に開かれていくようでなければなりません。」（アマルーフ 2019:185-186）」

人々の国際移動が活発になされてきた昨今、人々のアイデンティティは、出身国に帰属されるものばかりでなく、複数の国に住み、複数の言語を操り、複数の文化的背景の境界で生きる人々にとって、それぞれのアイデンティティは多様であり、可変的柔軟性を持ちながらも複雑であることを理解することが、いままきに求められているのである。

6. おわりに

本稿では、コロナ禍において、日本と中国との狭間に生きる在日中国人の生活やそのまなざしに着目しつつ、リスクとそれによる不安を抱えながら言葉にはなりにくい思いを理解することで、それらの事柄が導く意味を解釈してきた。コロナに関する先行研究において、外国人への忌避態度の研究（Yamagata, 2020）は、段階的な傾向を提示する貴重なデータと考えられるものの、そうした規則性や法則性の背後には、一人ひとりの内なる思いとともに、時に行動とは相反する動的な心の変化や複雑な内実が潜んでいることが、本研究より明らかとなった。コロナに関わる物事が日々変化し続ける中でのリテラシーを養い、文化や社会的背景を超えて他者理解を深めることは、コロナ禍において個人から国家レベルへとボトムアップ的にコンフリクトを解消する重要な鍵となるであろう。世界中のコロナ事情がいまだに収束していない現在、コロナと長期的に共存する心の備えも持ちつつ、世界の人々が「運命共同体」として、コロナとの戦いをともに生きている世界中の人々に、対抗より相手を理解しようとする気持ちで暮らしていくことで、コロナの経験を生かしてより大きな課題も乗り越えることを筆者は期待している。

中野卓は「個人の社会学的調査研究について」（社会学評論、32、2-12（1981））の中で、「新

たな人間像が模索されなくてはならなくなっています。このままでは人類の未来が危ぶまれているという懸念がありますが、こういうとき、既成の人間類型を立て変えて、個人についての新たな諸典型を提示する新しいタイポロジー、社会学に必要となってきたと考えますが、そのためにも個性ある生身の個人の研究がいま必要なのであります。」と言及している。今後、災害に対処しながら生き抜く境界人を捉える本研究を深めて行く際には、「語り得ない」ことの重要性を意識しながら、個人のライフヒストリーの諸事例を一つ一つ検討していく中で、「人間の生き方」や個々の「生活史」の意義を展望していきたい。

注

- 1) BBC ニュースウェブ版「トランプ氏、新型ウイルスは「中国ウイルス」 中国は反発」2020年3月19日。
- 2) 毎日新聞ウェブ版「『新型コロナ』と呼んでいること、否定しているつもりはない」麻生氏釈明」2020年3月23日。
- 3) 特定の地域や民族に対する攻撃、差別や偏見の助長を防ぐことを目的として、世界保健機関（WHO）はウイルスの呼称に国名や地名などをつけることは避けるといったガイドラインを定めた。しかし、昨今のコロナ禍の事態に「武漢肺炎」のような書き込みが、コロナに関するニュースのコメント欄では多く見られたと筆者は実感した。
- 4) 世界保健機関（WHO）は2020年2月11日、中国を中心に流行している新型コロナウイルスによる病気の正式名称を「COVID-19」に決定したと発表した。COVID-19は「コロナ（Corona）」、「ウイルス（Virus）」、「病気（Disease）」という単語と、この病気がWHOに報告された「2019年」の組み合わせでできている。
- 5) NHK ニュースウェブ版「香川県内の小学校 中国人を差別する内容のはがき届く」2020年2月26日。
- 6) NHK ニュースウェブ版「中国人を中傷する手紙 横浜中華街の複数の店に 市が調査」2020年3月5日。
- 7) Yahoo ニュース「「中国人は帰れ」にも、黙ってゴミ拾いを続ける。日本に暮らす中国人たちがコロナ禍で固め静かな決意」2020年8月26日。
- 8) Yahoo ニュース「日本人はもっとコロナに警戒を！在日中国人ボランティアが訴え」2020年4月11日。
- 9) 配布運動に関する記述は、人民網日本語版「「パンダの恩返し」華僑華人ボランティアが東京の街頭でマスク配布」2020年3月2日の記事、及び毎日新聞ウェブ版「新型コロナウイルス 中国人女性、東京・渋谷でマスク配布、武漢代表し「恩返し」」2020年2月27日の記事に基づいている。
- 10) コロナ感染拡大防止対策として、3人以上の集会を控えるために、インタビューはオンライン上で行った。

- 11) 2012 年 11 月、中国共産党第 18 回全国代表大会において「人類運命共同体」の理念が提唱された。人間は、如何なる個人・個体も、如何なる集団も、本来お互いに依存し合い、支え合うことなしには存続不可能であり、「共に生き、共に笑おう」と、人と人との絆や人間の持っている力を信じることが強調された。C 氏が語った「運命共同体」という言葉に関して、こうした中国政府の発言によるポジティブなニュアンスを織り込んでいるだろうと筆者は考えている。

引用文献

<日本語>

- 赤坂憲雄 (2019),「変り続け、問い続ける、『異人＝よそ者』という存在」,『CEL : Culture, energy and Life』第 123 巻, 2-7 頁
- 梶谷懐 (2020),「コロナ禍で問い直される「国家」と「個人」,『公研』第 58 巻 7 号, 36-53 頁
- 橋元良明 (2020),「新型コロナ禍中の人々の不安・ストレスと抑鬱・孤独感の変化」,『情報通信学会誌』第 38 巻 1 号, 25-29 頁
- 高田和生・木下淳博・山口久美子等 (2020),「コロナ禍対応で見えてきた,ポスト・コロナ時代に目指すべき医歯学教育についての提言」,『医学教育』第 51 巻 3 号, 372-374 頁
- 鳥海不二夫・榊剛史・吉田光男 (2020),「ソーシャルメディアを用いた新型コロナ禍における感情変化の分析」,『人工知能学会論文誌』第 35 巻 4 号, F-K45_1-7 頁
- 成瀬元気 (2020),「困難な時こそ挑戦が大切—コロナ禍の中での新しい試み」,『医学教育』第 51 巻 3 号, 315-315 頁
- 中野卓 (1981),「個人の社会学的調査研究について」,『社会学評論』第 32 巻, 2-12 頁
- アミン・アマルーフ (小野正嗣訳) (2019),『アイデンティティが人を殺す』,筑摩書房

<英語>

- Yamagata M, Teraguchi T, Miura A (2020). The Relationship between Infection-Avoidance Tendencies and Exclusionary Attitudes toward Foreigners: A Panel Study of the COVID-19 Outbreak in Japan[J].

<中国語>

- 高洪 (2020), 日本の新冠肺炎疫情应对及其对中日关系的影响,《日本学刊》2020 年第 2 期, 27-32 頁
- 韩东育 (2020), 民间外交与文化共享对构筑新时代中日关系的意义——对中日携手抗击新冠肺炎疫情的若干思考,《日本学刊》2020 年第 2 期, 33-38 頁

<参考情報リンク>

新型コロナウイルス時系列ニュース NHK :

<https://www3.nhk.or.jp/news/special/coronavirus/chronology/> (2020 年 9 月 10 日 閲覧)

コロナ感染人数 WHO ホームページ :

<https://covid19.who.int/region/wpro/country/jp> (2020 年 9 月 10 日 閲覧)

人民網 (日本語版) :

<http://j.people.com.cn/> (2020 年 9 月 10 日 閲覧)

Chinese Residents in Japan Living in the Margins During the COVID-19 Outbreak: A Consideration of their Living Conditions Using the Life Story Method

Shinuo WANG, Yuyu HU and Emako MIYOSHI

As infectious diseases caused by the COVID-19 virus have spread worldwide since January 2020, there have been time lags in the response between national governments. In particular, compared to the Japanese government response, the Chinese government response was faster and tougher. In the early days of the outbreak, with large numbers of infected people in China, Chinese residents in Japan received information from their home country and took preventive actions ahead of Japanese residents. In Japanese society during this time, the exclusionary attitudes toward Chinese people have become more obvious than before. In highlighting the thoughts and experiences of Chinese residents in Japan, who are living in the margins between the two nations during the COVID-19 outbreak, this study considers both current issues related to the COVID-19 outbreak and prospects for the future. Specifically, we conducted focus groups with Chinese international students living in Japan and collected the life stories of three Chinese individuals who work in Japan. The results indicate that Chinese residents in Japan have complex worries, that they have their own solutions in the midst of sudden changes, and that cognitive changes are occurring over time. Moreover, we found that the margin of Chinese residents in Japan was strengthened at the beginning, but weakened later on over the course of the COVID-19 outbreak.